

クローサー

2005(平成17)年2月24日鑑賞(試写会・梅田ピカデリー)

★★★



監督・製作＝マイク・ニコルズ／脚本・原作＝パトリック・マーバー／出演＝ジュリア・ロバーツ／ジュード・ロウ／ナタリー・ポートマン／クライブ・オーウェン（ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント 配給／2004年アメリカ映画／103分）

……イギリスで大成功をおさめた戯曲を映画化した恋愛ドラマ！「カラダを重ねるたび、唇が嘘を重ねる」というコピーからわかるとおり、登場する4人の男女が絡み合う「大人」の恋愛ドラマは複雑で難解。そしてアングロ・サクソン民族の恋愛ドラマらしく、セックス面はかなり即物的……？でも、恋愛と男女の機微に関する赤裸々な愛の言葉の数々は貴重。よく勉強しておけば、あちこちで使えることは確実だが……？

大ヒット戯曲の映画化は……？

この映画は、パトリック・マーバーの戯曲『CLOSER』を映画化したもの。1997年5月イギリス国立劇場で初演されたこの作品は大ヒットし、ブロードウェイをはじめ、世界中100以上の都市で上演されているとのこと。登場人物を男女4人に限定し、それぞれのキャラを明確に設定したうえ、大人の男女による複雑に絡み合う恋愛を、赤裸々な会話を中心に構成した戯曲。映画はそのストーリーを多少変更したものの、戯曲の基本スタイルをそのまま堅持。果たしてそれが映画として成功しているかどうか、さてあなたの評価は……？

最初の男女の出会い……？

最初に登場する男女はダン（ジュード・ロウ）と若い女性（ナタリー・ポートマン）。でも2人は見知らぬもの同士。この2人の出会いは朝の混雑するロンドンの街の交差点。その交差点で若い女性が車と接触して倒れ込んだことがきっか

けだ。

男女の出会いなんて単純なもの。仕事を気にしながらも仕方なく、あるいは半分運命に導かれるように彼女を病院に運び、当面の世話をしたダン是一目でこの女性に心を惹かれてしまった。倒れて10秒ほど失神していた若い女性は、ダンに「ハロー、ストレンジャー」と話しかけた。そして自分の名をアリスと名乗り、ニューヨークからロンドンに着いたばかりだと説明。さらに驚くことに、自分の仕事はストリッパーだと紹介……。驚くダンだったが、一目で惹かれあった2人は、まもなく同棲生活に……。

アンナの登場

それから1年半後。アンナ（ジュリア・ロバーツ）は写真家。それも自分でスタジオを持ち、近々個展を開くというからかなり成功した写真家。いや、写真家ではなくフォトグラファーというらしいが……。他方、新聞社で死亡記事ばかり書いていたうだつが上がらない記者のダンには、アリスをモデルにした小説を書くことに成功。いよいよこれからは……。そんなダンには、今日その出版に向けた写真撮影のためアンナのスタジオにいた。

この2人の出会いもここがはじめて。しかし、カメラマン VS モデルとして話をしながら写真を撮っている間に気持ちが惹かれあった2人はキスを交わそうと……。しかし、アリスと同棲していると聞いたアンナはそれを拒否。そんな微妙な雰囲気の中で、ダンを迎えにきたアリスとアンナが初のご対面をすることに……？

ラリーの登場

それから半年後。次の登場人物であるラリー（クライブ・オーウェン）は、自分で開業している皮膚科専門の医師。ダンはこの男とは何の関係もない。2人が「つながった」のは何と、パソコン上でのチャット通信によるもの。しかも、ダンにはアリスと同棲生活を送りながらも、心に残っているアンナになりすまして、女言葉を使い、エッチサイト（？）を利用してラリーと超過激なチャットを……。そして「会いたい！」と申し出てきたラリーに対して、「いいわよ。水族館で

……」ということに……。

水族館での2人の出会いは？

チャット通信で指定されたとおり、ラリーはコートの下に白衣を着て水族館へ。そして偶然(?)そこに座っていたアンナに話しかけたラリーは……? お互いそれなりの社会的地位にある2人の男女がこんなトンチンカンな出会いをすることはまずありえない。それだけに、そこでの会話は実に面白く、さすがシェークスピアを生んだ本場イギリスの戯曲だと感心。

ダンに騙されたとわかった2人だったが、それはさておき、ここでもこの2人が急速に惹かれ合うことに……。

複雑に絡み合う4人の男女の愛……

以上が、この映画の登場人物4人それぞれの出会いの紹介だが、そのすべてが現実離れした突飛なものばかり。しかし、男女の恋愛ドラマは、そうだからこそ面白い! そして、ここまでのプロローグともいべき男女の出会いは、4人それぞれの容姿やキャラクターの魅力も含めて十分説得力があるため、さてこれからどのように展開していくのだろうかと十分期待させるもの。しかしその後の展開は……?

それを一言でいえば、私が日本のまちづくり法を表現している言葉どおり、複雑・難解ということ。ここで、その複雑・難解な4人の男女の恋愛ストーリーの展開を1つ1つ紹介する気は毛頭ないが、ある意味ではその説明をしていく努力をしなければ、誰と誰が、どういう気持の動きによって、いつ何をして、その結果どうなって……ということがわからなくなってしまいそう……? そういう複雑・難解なストーリーが好きな人にはこの映画は最適だが……?

最初の嫉妬心は……?

この映画で最初に示される嫉妬心は、アンナのスタジオにダンを迎えにいったアリスがみせるもの。スタジオに入ってすぐにダンとアンナとの間の微妙な雰囲気気づいたアリスは、「トイレに……」と言ってその場を離れたが、実は物陰

に隠れてダンとアンナの間で密かに交わされる会話を盗み聞きしていた。そして、「私も写真を撮ってもらいたい」と言って、ダンをスタジオから外に出したうえで、アンナとサシの対決(?)に。純粹に悲しみの涙(?)を流すアリスの表情を的確に捉えたアンナのカメラは、立派な作品を生んだものの、男女の情愛の絡みはここからややこしいものになっていったというわけだ。

美男美女も嫉妬心は同じ……

その後のストーリー展開の中で最大のキーワードとなるのは、嫉妬心。ダンやアリスのような美男美女、そしてラリーやアンナのようにその上さらに高い社会的地位が備わっていても、男女の関係において示される嫉妬心は人間共通のものらしい。

この映画が、複雑・難解なストーリー展開の中で必然的に浮かびあがらせてくる嫉妬心のあり方をみていると、やっぱりナと思う反面、ちょっと疲れてウンザリしてくる面も。

しかし、嫉妬心をめぐって凝縮された4人の男女の愛の言葉や争いの言葉は数々の名言を生んでいるから、それは大いに参考になるはず……。

第2のキーワードは独占的セックス欲！

映画の後半、次々と展開される4人の男女のすれ違い、そしてその結果発生する言い争い。

そこには嫉妬心の他、特に2人の男が示す独占的セックス欲が露骨。もともとアングロ・サクソン民族は、東洋人と比べて性的欲求も動物的で即物的なことは当然(?)だが、ダンのような美男がそしてラリーのような社会的立場のある開業医が、そんな性的欲求を抱えており、それを露骨に口にし、実行するというのはちょっと驚き……！

人間の本性なんて所詮そんなモノと思うものの、寅さん流に「そこまで言っちゃおしまいよ……」と思う面も。「もう少し東洋的にオブラートに包んで丸く収められないものか……」と私のような「イケイケ」の弁護士ですら思ってしまったが……？

配役は絶妙！

男2人、女2人の登場人物の配役はホントに絶妙。容姿といい、演技力といい、最高のものになっている。

この映画では、主演・助演の区別が難しいが、役者の「格」からいって、映画1本の出演料が20億円とハリウッドを誇るジュリア・ロバーツと、『コールドマウンテン』（03年）ですばらしい演技をみせたジュード・ロウの2人は、やはり主演としなければならないところ。しかしその結果、クライブ・オーウェンとナタリー・ポートマンの2人がゴールデン・グローブ賞最優秀助演男（女）優賞を受賞したうえ、アカデミー賞助演男（女）優賞にもノミネートされたのはちょっと皮肉……。

『コールドマウンテン』で、主人公に一夜の宿を提供する未亡人役として登場したナタリー・ポートマンは、私がおの美しさにビックリした女優だったが、この映画でも何とも妖しげな女の魅力を存分にみせている。助演女優賞の受賞やノミネートは当然だろう。

映画終了後の会話は？

映画が終了し、一斉にエレベーターに向かう観客の中には、おしゃべりなグループがいるもの。別にオバさんに限らず、若い女の子同士でも、あるいはアベックでも、ここで耳に入ってくるおしゃべりや会話を聞いていると、今観た映画についての正確な印象が語られているものが多い。この映画についてのその会話に共通するキーワードは、「わからへん！」というもの。

私もそれに同感！ ここまで複雑・難解に話をコネくり回さなくてもいいのでは、と思うのだが……？ だから私の採点はちょっと低いが、異論のある人が多いかも……？

2005(平成17)年2月25日記